解　説

鵜戸　聡

ここに訳出したのは、モロッコ出身のフランス語作家アブデッラー・ターイアの自伝的小説『救世軍』（L'armée du Salut, Seuil, 二〇〇六年）の序章に相当する第一部である。三部構成だが分量的には全体の一割程度にすぎず、兄をはじめとする年上の男たちへの憧れと失恋、自らのセクシュアリティをめぐって展開する主人公アブデッラーの物語の前哨戦として、幼年時代の両親の思い出を語った部分にあたる。

ターイアは、一九七九年に首都ラバト近郊のサレー生まれ、ムハンマド五世大学、ジュネーブ大学を経てパリはソルボンヌに文学を学ぶ。二〇〇〇年代に頭角を現した新しいマグレブ作家として、現在に至るまで定期的に話題作を発表している。

イスラーム圏には珍しいオープンリー・ゲイの作家としても注目を集めており、おそらくアラブ作家初と言って良いほど盛んに、（政治はもちろんのこと）同性愛の問題についてフランスやモロッコのメディア（とりわけ政権に批判的なフランス語週刊誌 TelQuel など）で発言を続けている。

初めてフランスで出版された短編集『わたしのモロッコ』（Séguier, 二〇〇一年）には、チュニジア生まれのフランス人作家ルネ・ド・セカッティの序文が付されているが、後者は八〇年代のアルジェリア文学の新星、盲目の作家ラバハ・ベルアムリの紹介にも尽力したほか、日本文学の翻訳者としても知られている。

長編小説だけでもほかに以下の作品を発表している――『トルコ帽の赤』（二〇〇四年）、『アラブの憂鬱』（二〇〇八年）、『王の日』（二〇一〇年）、『不貞なる者たち』（二〇一二年）、『死ぬための国』（二〇一五年）。なお、二〇一四年には本作『救世軍』（二〇〇六年）を自ら映画化した。

「ラバトのそばの小さな家で、アブデッラーは両親と八人の兄弟姉妹と暮らしていた。思春期になって、彼は兄への淡い恋心に気づく。彼が女に恋した時、アブデッラーは捨てられたように感じる。スイスに旅立って見つけたのは、あれほど待ち望んだ自由ではなく、排除と愛の幻滅だった……」

（裏表紙より）